世界名作劇場

小公女セーラ（プリンセス）

『屋根裏にきた怪物』

第 31 話

提供 ハウス食品工業

制作 日本アニメーション
フジテレビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第三十一話「屋根裏にきた怪物」）

セーラ・クルー

ミンチン院長

アメリア先生

ベッキー

ピーター

モーリー

ジェームス

ラム・ダス

エミリー（人形）

シーザー（猫）

メルの一家（ネズミ）

ハリジャン（インド猿）

1

ミンチン女学院・裏屋根（朝）

朝日に、啼き舞う雀の群――

× × ×

天窓が開き、セーラが現われる――

セーラ「お早う、雀さんたち、さ、お食事よ」

セーラ、パンクズを撒いてやる――

群り集って食べる雀たち――

セーラ、ふっと一方に眼を向ける。

2

隣家の屋根裏部屋の天窓（朝）

ひっそりと閉されたまま、人影も見えない――　セーラの声がかぶる。

セーラの声「今日も、まだ閉じたままだわ」

3

ミンチン女学院・裏屋根（朝）

セーラ「（吐息）矢張り、お隣りには、あの屋根裏部屋に住むような人は、いないのかも知れない」

セーラ、そっと天窓を閉じる――

4

同・ミンチンの居室（朝）

ベッドで、毛布に載せた盆で、朝食のトーストを食べているミンチン――

傍のテーブルで、紅茶を入れたセーラが、その盆に給仕する――

ミンチン「セーラ……」

セーラ「はい……？」

ミンチン「昨日、表を通りましたが、隣りの鉄柵に較べて、うちの鉄

栅はサビが眼立ちます。ペンキ位塗っておくように……」

セーラ「はい、院長先生……」

5 同・表

馴れぬ手つきで、鉄栅にペンキを塗っているセーラ——
夏の陽差しに汗を拭う。
玄関ドアが開き、アメリアが出て来る。

アメリア「あ、セーラさん……それが終ったら、私の外出用のスカート、アイロン掛けといてね」

セーラ「はい、アメリア先生……」

6 同・地下の作業場

大汗で、アイロン掛けをしているセーラ。

取り込んだ洗濯物を抱えて入って来るモリー。

モリー「さあ、掛けて貰うものは、まだまだ山とあるからね」

傍の台に山積みにする――

セーラ「はい、モリーさん……」

買物篭を手にしたジェームスが入って来る――

ジェームス「セーラ、そいつが終ったら、買い出しがあるんだぞ」

セーラ「はい、ジェームスさん……」

7 同・表

買物篭を提げたセーラが、使用人階段を昇って来る――

近づく馬車の音に、ふっとその方を見る。

8 隣家の表

黒い自家用馬車が停り、山高帽にステッキの医師が降り立つ――続いて、黒革の医者鞄を抱えた看護婦二人が降りると、馬車を待たせて、玄関口へ向う。

×　×　×

通りから、凝っと見守るセーラ――

セーラのM「また、お医者様が見えているわ」

×　×　×

玄関口を、ターバンの老従僕が開き、丁重に迎える――

無言で中に消える医者と看護婦二人――

×　×　×

セーラ、凝然と見送る――

セーラのM「お隣りの御主人、よほどご病気がお悪いのかしら……」

セーラ、居室と見える出窓の部屋に眼を移す

×　×　×

その出窓のある部屋――白いカーテンが引かれた儘、

ひっそりと人の気配もない。

セーラのM「早くよくなって下さるといいのに……」

×　　×　　×

セーラ、そっと買物への道へ歩き出す。

9　コベント・ガーデン市場の風景

通りかかる撒水車と――

水を浴びて追い騒ぐ街の子供たち――

10　同・一角

買物前の篭を抱えたセーラと、ホウキを手にしたピーター――

セーラ「そうなのよ、ピーター……お医者様は毎日のように見えてい

るし、お部屋のカーテンは、ずっと引かれたままなの」

ピーター「うへぇ……それじゃ、引越して来たお隣りさんって、相当な重病人じゃないですか」

セーラ「だから、心配なのよ……奥様やお子さんの姿も見えないし、きっと、ひとりぼっちで苦しんでいらっしゃるんだわ……そう思うと、私、インドでひとりぼっちで亡くなったお父様の事が想い出されて……」

セーラの声が曇る――

ピーター「お嬢さん……」

セーラ、はっと気づく――

セーラ「ごめんなさい……」

セーラ、無理に笑顔を作り弾んでみせる。

セーラ「そう云う訳でね、ピーター、私が期待してたみたいに、誰かがお隣りの屋根裏部屋に上って来て、私の部屋に手を振ったり、大声で話しかけて来て、お友達になってくれる……なん

て夢は、残念ながら、当て外れだったのよ」
ピーター「やれやれ……ベッキーもまだ帰って来ないし、お嬢さんもひとりぼっちじゃ、淋しいですよねえ」
セーラ「大丈夫！ ピーターがいるわ」
ピーター「えッ、ウッソォ、いやその、ヒャア、参った参った、ははは……」

11

ミンチン女学院・前の広場

野菜の入った買物篭を抱えて帰って来る。
セーラ、はっと前方に気づき、立停る。
× × ×
離れた前の舗道に——例の白い夏帽子をかぶり、旅行バスケットを提げたベッキーが、ミンチン学院の方をオドオドと窺って行きつ戻りつしているのが見える。

セーラ「(愕然) ベッキーだわ！」

×　　×　　×

急いでその方へ走る——

×　　×　　×

うろうろしているベッキーの背後に、駆け寄って来るセーラ——

セーラ「ベッキー！」

ベッキー、仰天して飛び上る——

ベッキー「うわッ、びっくりした！」

途端にセーラと気づいて——

ベッキー「ひゃあ、お嬢様じゃございませんか、おなつかしゅうございます！」

セーラ「なにを云ってるのよ、ベッキー……頂いた夏休みは、まだまだ先まである筈でしょ」

ベッキー「はい……それはそうなんですけど……実は……お母さんが

セーラ「……そろそろロンドンへ帰って、働いておくれって……」
セーラ「えッ……」
ベッキー「お母さんは、口には出しませんでしたけど、私、判っているんです……私が、田舎にいると、お給料は入って来ないし、反対に私が食べる分お金が余分にかかるし、ほんとはお母さん、困っていたんです……だから、私……（首垂れる）」

じっと聞くセーラ――

セーラ「そうだったの……だったら、手紙で帰ることを報せてくれればよかったのに……いつロンドンへ着いたの？」
ベッキー「はい、先刻、キングスクロスの駅に着いて、それからトコトコここまで歩いて来たもんですから、もう汗びっしょりで……」
セーラ「まあ……それなら早く中へ入ればいいのに」
ベッキー「そ、それが……」

セーラ「どうしたの？」

ベッキー「私、思い出したんです……院長先生が私にお休みを下さったのは、夏休みで生徒さんたちが帰って、仕事はお嬢さん一人ですむようになったからだって……それを、早めに戻って来たら、また、余計な食費がかかるって、院長先生に叱られるに決ってます……それが恐ろしくて、足がすくんじまったです」

セーラ「まあ……」

ベッキー「それで、お嬢様が用事で出て来て下さりはしないかと、ここでお待ちしてたんです……」

セーラ「判ったわ、ベッキー……院長先生には、私からもお話しするわ。さ、入りましょう」

ベッキー「はい、お嬢様……」

セーラとベッキー、道を渡り……

12　ミンチン女学院・表

……使用人階段を降りて行く。

13　同・台　所

ジロリと、セーラとベッキーを見おろすモリーとジェームス——

モリー「フン……院長先生のお許しもないのに、こんなに早く戻って来ちまって……」

ジェームス「一体お前の食い分は、どこからけ出せるってんだよ」

ベッキー「す、すみません（首垂れる）」

セーラ「あのォ、食べ物の事でしたら、私の分を二人で頂く事にします……ベッキーをお願いします……」

顔を見合せるモリーとジェームス——

モリー「フン、そんな勝手な理屈が、院長先生に通用するかどうか、
当ってみるんだね」

ジェームス「フフ、また雷が落ちるだろうぜ」

二人、笑い乍ら出て行く――

顔を見合せるセーラとベッキー――

ベッキー「お、お嬢様……」

セーラ「大丈夫よ、さ、行きましょう！」

二人、旅行つづらを提げると出て行く。

14 同・院長室の前

同・院長室の前その旅行つづらが置かれている。

15 同・院長室の中

ジロリとセーラとベッキーを見るミンチン――脇にアメリア。

ミンチン「なんですって？……食べ物を二人で分けても働かせて欲しいですって？」

セーラ「はい、院長先生……ですから早目に帰った事でベッキーを叱らないで下さい」

顔を見合せるミンチンとアメリア――

ミンチン「よろしい……ベッキーがそれ程働きたいと云うのなら、許す事にしましょう……勿論、食事は今迄通り食べさせます」

ベッキー「えッ……」

ミンチン「但し、今月の給料はナシ、食費は来月の給料から引きますから、そのつもりで」

アメリア「お、お姉様！」

ミンチン「さ、行ってよろしい」

セーラ「は、はい、院長先生……」

16 同・廊　下

出て来るセーラとベッキー。

ベッキー「有難うございます、お嬢様……ほんと云うと私、なによりもかによりも、お嬢様の傍に帰って戻れただけでどんなに嬉しいか知れないんでございます……」

セーラ「私もよ、ベッキー……さ、台所で待っているわ。荷物を置いて来て」

ベッキー「はい、お嬢様……」

ベッキー、旅行つづらを提げると階段を上って行く——
微笑でほっと見送ったセーラ、地下へ。

17 同・三階の廊下

眠っているシーザー——　ベッキーが上って来る。

18 同・屋根裏部屋の前

仄暗い階段を上って来るベッキー――

19 同・ベッキーの部屋

ギィッと音がして、薄暗い部屋にベッキーが入って来る。
その時、どこからか、鋭い奇声――
ベッキー、ビクッと見廻す。
――また奇声。
ベッキー、次第に恐怖がつのり後退る。
また奇声――ベッキー、悲鳴をあげて旅行つづらと夏帽子を落すと、部屋を飛び出す。

20 同・階段

転がるように駆け降りて来るベッキー。

21 同・台所

野菜の皮をむいているセーラ――
そこへベッキーが息を切らせて駆け込んで来る。

セーラ「どうしたの、ベッキー」
ベッキー「（荒い息）お、お嬢様……私の留守に何か変った事がございませんでしたか」
セーラ「変った事？……あ、そうだわ。あなたにお話するのを忘れてたわ。実はね、空家だったお隣りに、インドから帰って来た方が引越して来たのよ」
ベッキー「そ、そのインドの化物でございます！」
セーラ「化物？」
ベッキー「い、いま、屋根裏部屋へ荷物を置きに戻りましたら、隣り

　　　から恐ろしい叫び声が聞えたんでございます」
セーラ「叫び声ですって？」
ベッキー「はい、つまり、その……」
　　　ベッキー、真似をしようとする──
ベッキー「ギャァァ……」
セーラ「ベッキー！」
ベッキー「いえ、こんな声じゃありませんでした。とにかく人間とは
　　　思われない声が聞えて……私、恐ろしくて思わず部屋を飛
　　　び出して……」
セーラ「行ってみましょう！」
ベッキー「えっ」
セーラ「屋根裏部屋へよ」
ベッキー「お、およしなさいまし、お嬢様……きっとお隣りには、恐
　　　ろしいインドの化物が入り込んでるんでございます！」
セーラ「そんな筈はないわ、大丈夫よ、ベッキー！」

セーラ、ドアへ――

ベッキー、慌てて追う――

（中　CM　）

22

同・ベッキーの部屋

ドアが開き、そっと入って来るセーラ、見廻すが、変った音は聞えない。
そのあとから、怖々続いて来るベッキー。

ベッキー「お、お嬢様……」
セーラ「私の部屋の窓から、見てみましょう」

二人、引返す――

23

同・屋根裏部屋

入って来るセーラとベッキー。
セーラ、テーブルに行くと、椅子をその上にのせる。

セーラ「さ、ベッキー、あなたも上れるわ」
ベッキー「えっ……わ、私は、御遠慮致しますです」

セーラ「平気よ、ベッキー、さ、どうぞ」

セーラ、先にテーブルに上り、更に椅子の上に上る。

その下で、落着かずに見上げるベッキー、遂に好奇心に負けて、矢庭にテーブルによじのぼる――

24 同・裏屋根の上

天窓が開き、セーラと、続いてベッキーの顔が覗く――

× × ×

離れた隣家の屋根裏部屋の窓がひとつ、開け放たれている――

× × ×

セーラ「まあ……あのお部屋に、人が入ったのだわ」

その時、その窓の下から、奇狂な叫び声が聞える――

思わずセーラにしがみつくベッキー――

ベッキー「お嬢様、あの声です！」
セーラ「シッ……なにか見えるわ」

× × ×

離れた隣家の天窓の下枠に——銀白色の毛に覆われた
細い手がかかる。
一瞬、窓枠に躍り上る影——首に引縄をつけた、全身
銀白色の手長猿（ハヌマンラングール種）。

× × ×

セーラとベッキー、驚く——
セーラ「まあ……インド猿だわ」
ベッキー「で、では……あの叫び声は、あのお猿……」
その時、隣家の中で猿を呼ぶ声——
声　「ハリジャン！……ハリジャン！……」

× × ×

やがて、隣家の天窓に、引縄の一端を捲いたターバンの

ラム・ダスが現われ、猿のハリジャンを抱きとるのが見える。

×　×　×

セーラ、驚きと喜びに眼を見はる。

セーラ「まあ……ラム・ダスさんだわ」

ベッキー「えっ、ごぞんじなんですか」

セーラ「まだ話した事はないわ……でも、私たち、お友達になれるかも知れなくてよ」

×　×　×

セーラたちに気づかず、猿のハリジャンの頭をなでているラム・ダス――

×　×　×

セーラ「よくて、ベッキー……インド語でご挨拶してみるのよ」

ベッキー「えっ、インド語、でございますか」

セーラ「ええ、ナマスカルって云うのよ」

ベッキー「な、なんて意味でございます？」

セーラ「こんにちは、よ……さ、一緒にね」

セーラとベッキー、ラム・ダスに叫ぶ。

セーラ「ナマスカル！」

ベッキー「ナマス……」

×　　　　×　　　　×

はっとセーラ達の方に気づくラム・ダス、驚きと喜びを顔一杯に見せ、白い歯で微笑すると、

ラム・ダス「ナマスカル！」

ラム・ダス、両手を拡げると、優雅に叩頭する――

一瞬、ラム・ダスの手を離れたハリジャンが、スルスルとセーラの方へ伝い歩く。

ラム・ダス「ハ、ハリジャン！」

はっとして引きずる引縄のはしを摑もうとしたが、一瞬遅く、ハリジャンはジャンプして、ミンチン女学院側の

裏屋根に飛び移る――

× × ×

驚くセーラとベッキー――

ベッキー「お、お嬢様……」

屋根伝いに走り寄って来たハリジャン、いきなりベッキーの肩にとびつく――

ベッキー「キャア……！」

次の瞬間、ハリジャンは引縄を引いて屋根裏部屋へ躍り込む――

× × ×

ラム・ダス「ハ、ハリジャン！」

25 同・屋根裏部屋

天窓から床に飛び降りたハリジャン、キョロキョロと辺

りを見廻したが、ふとベッドの上に置かれているエミリーに気づくと、近づき、抱きかかえる――

×　　×　　×

天窓近くの椅子の上から、茫然と見おろすセーラとベッキー。

ベッキー「お、お嬢様……」

その時、窓外で、ラム・ダスの呼ぶ声。

ラム・ダス「ハリジャン！……ハリジャン！」

セーラ、はっと天窓へ首をのばす――

26 同・裏屋根の上

天窓から顔を出すセーラ――

×　　×　　×

隣家の天窓から、心配気なラム・ダスが叫ぶ――

ラム・ダス「ハリジャンは？……いえ、猿は？」

×　×　×

セーラ、室内を見定めてから叫ぶ。

セーラ「……いま、私のお人形で遊んでいるわ……私につかまえられるかしら」

×　×　×

ラム・ダス「いえ、その猿は、とても素早しこい悪戯者でして……お許し頂ければ、私が……」

×　×　×

セーラ「こちらへ渡って来られて？」

ラム・ダス「ひと飛びです！」

セーラ「では、どうぞ！」

×　×　×

忽ち、窓外に身を乗り出したラム・ダス、鮮かにひと飛びしてミンチン女学院側の裏屋根に飛び移ると、身軽に

急傾斜を天窓に近づく——

27

同・屋根裏部屋

急いで椅子を降り、テーブルを降りるベッキーとセーラ——

天窓に現われたラム・ダス、窓枠につかまると、ヒラリと一気に床に舞い降りる。

×　　×　　×

暖炉の前で、不思議そうに抱いたエミリーを見守っていたハリジャンが、はっとセーラやラム・ダスの方を見る。

ラム・ダス「ハリジャン……さ、来るんだ」

一瞬、ハリジャン、エミリーを床に捨てざま翻えって暖炉の中へ躍り込む——

ラム・ダス「あ、待て！」

咄嗟に追うが、一瞬の差で引縄の端がスルッと暖炉の上方に消えてしまう。
嘆息してセームたちに両手を拡げてみせるラム・ダス――

ラム・ダス「お嬢さん……このお隣りに、続きの部屋がありましょうか」

セーラ「ええ、ベッキーの部屋です」

28 同・ベッキーの部屋

暖炉に、長い尻ッ尾の先が垂れて見える。
ピョンと炉内に飛び降りて来るハリジャン、床の方へ出て来る。
忽ちベッキーの旅行つづらを引繰り返し奇声をあげて騒ぐ――

29

同・院長室前の廊下

ドアが開き、ミンチンが出て来ると、天井を振りあおぎ、首をひねる——地下に向うと呼ぶ。

ミンチン「ジェームス！……ジェームス！」

地下から上って来るジェームス。

ジェームス「お呼びで、院長先生……」

ミンチン「シーザーが、また鼠をみつけて騒いでるようです。仕末して頂戴」

ジェームス「へい、承知しました」

ミンチン、院長室に消える——

ジェームス「全く……セーラとベッキーはどこへ行っちまったんだろう」

ブツブツ云いながら二階の階段へ——

30
同・三階の廊下

眠っていたシーザーが、奇声に眼をさます――　のそりと起き、屋根裏への階段へ近づく。
突如、ドアに飛びつき、激しく鳴きながら板に前足をかけてかきむしりはじめる――
その時、階段を上って来るジェームス、シーザーの様子を見て、どっと駆け寄る。

ジェームス「こいつめ！　騒ぐんじゃない！　てのが判らないのかい！」

シーザーを蹴飛ばす――　シーザー、素っ飛んで階段へ逃げる。

ジェームス「（追う）このロクデナシネコめ！」

31
同・ベッキーの部屋のドア外

そっと中の気配を窺っているベッキーとセーラ。
ベッキー「わ、私のもので遊んでるみたいです」
セーラ「まあ……」
ベッキー「私、そちらの部屋へ追い出してみます」
セーラ「大丈夫？」
ベッキー「なあに、お猿と判れば、怖くなんてないです」
セーラ「じゃ、向う側でラム・ダスさんに捕えて貰うわ」
セーラ、隣りの屋根裏部屋に駆け戻る。
ベッキー「（腕をまくる）こ、怖くなんか、ないですとも」
いきなりドアを開け、飛び込む――

32 ベッキーの部屋

飛び込んで来るベッキー
ハリジャン、いきなり飜ると暖炉の中に飛び込む――

ベッキー「い、行きましたァ！」

33 同・屋根裏部屋

暖炉の前で待ち受けるラム・ダスと、セーラ―― だが、ハリジャンは現われない。
入って来て怪訝に見廻すベッキー。

34 同・裏屋根の上

突如、煙突の先端から、真っ黒にススで汚れたハリジャンが飛び出す。

35 同・屋根裏部屋

はっと屋根を見上げるラム・ダス、呼ぶ。

ラム・ダス「ハリジャン……！」

ふと、開いた儘の天窓の枠に、ハリジャンが現われる——

——

ラム・ダス「来るんだ！」

一瞬、天窓からジャンプして、ラム・ダスの肩に飛び移るハリジャン——

ラム・ダス、素早く引縄を摑み、ハリジャンを抱いてなでてやる。

——ほっと落着くハリジャン。

セーラ「よかった……」

ラム・ダス「有難うございました、お嬢様」

セーラ「とんでもありませんわ。お隣り同志ですもの、ラム・ダスさん」

ラム・ダス「私の名をご存知で？」

微笑で頷いてみせるセーラ——

セーラ「私、ずっと前から、お隣りに越して来る方と、お友達になりたいと待っていたんです。よろしく」

ラム・ダス「こちらこそ。突然お訪ねした事をお詫び申さねばなりません」

ラム・ダス、優雅に叩頭すると、

ラム・ダス「では、お嬢様、いずれ改めて」

セーラ「ご病気の御主人様によろしくね」

ラム・ダス、頷くとヒラリとテーブルから天窓に飛び上り、窓外に姿を消す。

急いでテーブル、椅子に上るセーラとベッキー——

36 同・裏屋根の上

天窓から顔を出すセーラとベッキー。

×　　　×　　　×

隣家の屋根に飛び移ったラム・ダス、振返って微笑で手を振る――

×　　　×　　　×

手を振って応えるセーラとベッキー。

×　　　×　　　×

ラム・ダス、ひらりと窓の中に消える。

×　　　×　　　×

顔を見合せるセーラとベッキー。

ベッキー「お嬢様、素敵な人がお隣りに見えましたですねえ」

セーラ「まあ、ベッキーったら」

二人、思わず笑い合う――

その時――

声「セーラ！……ベッキー！」

二人、はっと下を見る。

37 同・屋根裏部屋

入って来るモリー、天窓の二人を見て唖然——

モリー「呆れた！……どこに行っちまったかと思ったら、二人してこんな所で……さあ夕食の支度だよ、来ておくれ」

セーラ「はい、モリーさん」

モリー、バタンとドアを出て行く。

顔を見合せて首をすくめるセーラとベッキー

38 隣家の全景（夜）

その窓明り——が近づく。

セーラのN「その夜、私は、お隣りの御主人やラム・ダスさんの事をお父様に報告しました……」

じっと父母の写真を見ているセーラ。

セーラのN「そうよ、お父様……あの方たちは、インドにいらしたのよ……今に仲良しになってきっとインドのお話をきくつもりよ……お父様………」

（第三十一話　終）